

特別インタビュー

「調査結果から読み取れる課題とこれからの英語指導のあり方」

東京外国語大学大学院教授 根岸 雅史

調査結果から読み取れる課題を基に、今後、英語教育の現場ではどのような指導の改善を図っていけばよいのでしょうか。「中高英語教育研究会」の研究リーダーとして調査にかかわられた東京外国語大学大学院の根岸雅史教授に指導のヒントをうかがいました。

【指導方法】

言語活動の充実が依然として課題

今回の調査結果からは、昨今の英語教育改革を踏まえ、教員の指導観や授業観が大きく変化しているのが見て取れました。同時に、現状のさまざまな課題も浮かび上がり、これからの英語指導のあり方を考えさせられました。

中高における英語の授業のあり方は、明らかに変わりつつあります。例えば、従来型の授業には、文法を学び、訳読を繰り返すといったイメージがあると思いますが、今回の調査結果では、「教科書本文の和訳」の実施率は中高ともに7割弱にとどまっていました。一方で、「音読」「発音練習」は、ほぼすべての教員が取り入れていることがわかりました。従来から音読や発音練習は行われていましたが、今回の調査でこれほど高い数字として表れたのは、音声面をより重視する指導の表れといえるでしょう。

大きな課題は、言語活動を実践する教員が限られていることです。特に、中学校に比べ、高校は言語活動の実施率が一段低い状況でした。高校では大学入試対策を重視して指導していることが、その一因と考えられます。ただ、高校入試でもスピーキングは出題されていないにもかかわらず、中学校では「英語での会話(生徒同士)」「スピーチ・プレゼンテーション」などの「話すこと」の言語活動が高校よりも行われています。そこには、中高の教員間に意識の差があるはずですが、もちろん、入試のためだけに英語学習をするわけではありませんが、昨今議論されている大学入試改革の方向性を踏まえても、今後は高校でも言語活動をいっそう充実させる必要があるのは明らかです。

【言語活動と教員の意識】

間違いをさせることも、重要な学習プロセス

教員自身、言語活動の必要性をよく理解しているものの、十分に実行できずに悩んでいることが調査結果から読み取れます。例えば、「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」「4技能のバランスを考慮して指導する」などは、「重要だと思う」と答える教員が多い反面、「十分実行している」という回答は少なく、意識と行動が乖離しています。多くの教員が重要だと思っているにもかかわらず、実行できないのはなぜでしょうか。

言語活動の中でも、「英語での会話(生徒同士)」や「スピーチ・プレゼンテーション」に比べて、「ディスカッション」や

「ディベート」の実施率はかなり低くなっています。これらの活動の大きな違いは、「予測可能かどうか」です。生徒同士の英語での会話は、教科書の例文に沿ってやりとりする場面が想定されますし、スピーチ・プレゼンテーションは授業内容を踏まえて準備したことを発表する活動がほとんどでしょう。こうした言語活動は、教員の想定を超えた展開になることはまずありません。

一方、ディスカッションやディベートは、基本的に予測不能な言語活動です。あらかじめ例文を用意しておき、ディスカッションやディベートをしても意味はありません。そのため、教員は準備し切れない、というより、準備しようがない部分が大きく、指導への不安をめぐい去れないため、授業でディスカッションやディベートをしないのではないのでしょうか。

しかし、英語学習において、間違いが重要なプロセスであることは、生徒だけではなく、教員にもいえます。会話が予測しない方向に進み、教員が対応し切れなかったり、ミスしたりしても問題はないのです。生徒の興味に沿って話が進み、内容が理解できなくなったら、「先生はこのトピックは分からないよ」と、正直に言ってよいと思います。教員にとっても、間違いや知らないことを知ることは授業改善への第一歩となるのです。

生徒の英語力にかかわらず、言語活動は実施可能

言語活動を難しく捉えている教員も少なくないようです。ディスカッションのテーマは、社会問題など知的なものでもなくともかまいません。スポーツや芸能など、生徒にとって身近なトピックは格好のテーマですし、「今日の昼食は何にするか」でもよいのです。そう捉えると、ディスカッションといっても大掛かりな言語活動である必要はなく、授業のイントロダクションに適した気軽な活動に感じられるのではないのでしょうか。身近なテーマから始めて、自分の考えを英語で言うことに十分に慣れてから、社会問題などにつ



シンポジウムでの根岸先生

いて本格的に議論すればよいのです。

「生徒の英語力が足りないから、言語活動ができない」という声も聞かれますが、本当にそうでしょうか。英語力を高めることが先決と考え、単語や文法の反復練習ばかりしていたら、生徒はますます意欲を失いかねません。それよりも、身近なトピックで会話するサポートをしたほうが英語力につながる場合が多いですし、生徒自身が「もっと話せるようになりたい」と感じたら自ずと学習に向かうでしょう。英語の授業は、「楽しい雑談の時間」と思えるくらいがちょうどよいかもしれません。生徒に「間違ってもよいのだ」と感じられる雰囲気があれば、英語力のレベルにかかわらず、言語活動はできるとお考えください。

【自己研鑽】

教員自身が英語の言語活動を体験してほしい

教員自身も間違えてよいという話をしましたが、もちろん、わからないまま立ち止まってよいわけではありません。自己研鑽を通して、英語力や指導力を高める努力を続けましょう。

今回の調査でも、教員が多様な自己研鑽に取り組む姿が明らかになっています。英語教員として言語そのものに関心を持って高めていく姿勢は欠かせませんが、他方では英語を使い、自分の興味に沿って楽しむ体験をしてほしいと思います。映画、スポーツ、歴史、ファッションなど、対象は何でもかまいません。なぜそうした体験が必要かという、自分の興味や関心のために英語を使って調べたり考えたり、コミュニケーションを取ったりといった活動は、言語活動にほかならないからです。教員自身が英語を使用する経験を十分にすることで、言語活動への感覚が養われ、たとえば、オーセンティックなタスク作りや、コミュニケーション的なテスト作りなどをしやすくなるのです。

【教員の英語使用】

英語で伝えるという観点で、授業の構成は発問を見直す

授業で教員が英語を使用する割合が年々上昇していることは良い変化ですが、英語を使用する場面を見ていくと、今後の課題が浮かび上がってきました。

中高ともに「生徒への指示」「褒め・励まし」などが上位に入っていますが、これらは授業中での英語使用のスタートに過ぎません。次の段階として、「本文の内容を紹介・説明(オーラルイントロダクションやパラフレーズ)」「言語活動の説明(活動のモデル提示も含む)」といった場面で英語を使うことを目指してほしいと思います。言語活動の場面では、生徒と一緒に活動すれば教員も英語を使うのは自然な流れとなります。

英語での説明が難しいと感じられるのは、日本語で説明していたことを、単に英語に置き換えようとしていることが原因かもしれません。日本語で言っていた内容を英訳して言おうとせず、生徒が英語を使う言語活動をたくさん行うという観点で見直し、いかに授業を変えていくかを考えるようにしてください。

【CAN-DOリスト】

生徒の実態に沿ったCAN-DOリストの設定を

「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の設定については、中高ともに理解が進んでいると感じられました。ただし、CAN-DOリストを適切に設定して運用するのは難しく、理想と実態のギャップが大きいケースが多いことに注意が必要です。

CAN-DOリストが十分に機能していないケースでよく見られるのは、CAN-DOリストが授業の内容を列挙した「TO-DOリスト」となっている場合です。これでは短期目標の繰り返しに過ぎず、CAN-DOリストの本来の目的である長期的な学習イメージが持てません。

また、授業内容と結び付いていない、大まかな力を設定しているだけのCAN-DOリストも見られます。高校卒業時の「読むこと」の目標を「英字新聞が読める」と設定しているのに、3年間の授業で英字新聞を読む活動を一度も行っていないといったケースです。

CAN-DOリストを設定する上での最初の一步は、生徒の実態を知ることです。まず前年のリストから1項目でよいので、目標到達の度合いを確かめてみてください。教科書の内容に沿って設定していても、生徒全員が100%理解していることはありませんから、「教科書の内容」イコール「生徒に付く力」ではありません。1項目の実態を知れば、他の項目の見直しが必要かどうかも自ずと見えるでしょう。

【同僚性】

同僚との気軽な会話の中から解決策が見えることも

調査結果から、英語教員の多忙感や負担感が大きいことも明らかになりました。昔に比べて、教員同士が語り合う機会が減ったといわれています。そこで、英語教員が集まって話をするなど、同僚性を大切にすることで、少しでも気持ちに余裕を持てるようにしてはいかがでしょうか。

堅苦しいミーティングではなく、昼食やお茶をいただきながら気楽に話せる雰囲気をつくれれば、日頃の気持ちや悩みを率直に語り合えるかもしれません。その中で、ある教員が「言語活動をどう取り入れるべきか迷っている」と悩みを打ち明けたら、「それなら一緒にやってみようか」といった流れになることもきっとあるでしょう。

基本的には他教科も同じですが、特に、英語教員は、生涯にわたり成長し続けることが求められると思います。そのことを苦勞と捉えず、むしろ喜びとして学び続け、英語力や指導力を高めていってほしいと思います。そのためにも、先ほども触れたように、まずは、英語を自分のために使う経験をたくさんし、それを資産として授業やテストを考えることにつなげ、その経験を生徒に還元してください。教員経験年数を重ねるほど、教えることがますます面白くなるのが英語という教科の特性だと、私は思うのです。

*写真は「上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2015」の際のものです。